

八重山戦後開拓集落と母村との間の親族間交流の変容

越智 正樹

(京都大学大学院農学研究科 博士後期課程)

2010 年 1 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

八重山戦後開拓集落と母村との間の親族間交流の変容

越智 正樹

(京都大学大学院農学研究科博士後期課程)

1. はじめに

(1) 本稿の目的—国内開拓移住と母村との関係

本稿の目的は、沖縄県八重山郡西表島のある戦後開拓集落において、送出元との関係が現在、どのように結びついているかを明らかにすることである。国内開拓地を対象とした研究は従来、様々な観点からなされてきたが、その中で母村との関係、特に母村の文化・祭祀・社会関係等の踏襲や再生は、重要な論点の一つである。なぜなら「母村の伝統や社会関係」は単純に移植されるものではなく、「入植地の自然的、社会的条件」への適応過程において「取捨選択」されるものであり（蘭、1988、129）、その「葛藤と選択の過程」こそが「開拓村落の社会構造を把握する」上で重要だからである（関、1973、19）。例えば関（同上）、鷹田（1986）、鈴木（1993；1994；1995）は、北海道の近代開拓村落を対象とし、母村の祭祀や講組織等の移植と変容について論じている。また倉光（1998）は愛知県豊橋市の戦後開拓地を対象とし、開拓地の形成過程における祭り再生の意味を論じている。倉光によれば、母村の祭りの再生（新たな形と意味の付与を伴う）は開拓者にとって、母村の「生活世界」の再生の試みなのであり、開拓地の神社でこの再生に成功したとき、「入植という事業がその主体である開拓者の意識の上でも達成されたのだということができよう」（同上、77）。倉光は開拓地形成過程を、生活基盤整備としてだけではなく、開拓者の視点から見た「新たな生活の場の発展過程」として描いたのである。

もっとも、送出元の文化等が何らかの形で踏襲・再生されたとしても、それらの意味するところが、移住地での時と世代を経るにつれ、さらに変容し続けていくことは決して珍しくない（例えば貞好、2000；森、2007など）。また、移住者と母村とのつきあいが疎遠になっていくことも、「普遍的ともいえる現象」である（李、2000、29）。だが李（同上）は、「疎遠になっていながらも関係が深いという感情を持ちつづけるところに、移住者の『故郷』像を解きあかす重要なカギが潜んでいる」と述べる。李が対象としたのは在日韓国・朝鮮人と母村民との関係であるが、この指摘もまた普遍的なものと言えるであろう。また李は、在日韓国・朝鮮人が、ときとして母村民と距離を置くなどして「故郷」像を守っていることを挙げて、「人は大切なものを守るために、接近したり距離をおいたり関係を絶ったりする」と述べている（同上、56）。この指摘は、移出により疎遠となるのが「普遍的」な、故郷なり母村なりとの関係性の中で、それでもなお移出者が保とうとする親密性を考察する上で、重要であろう。

本稿はこれらの指摘を参考に、八重山戦後開拓移住集落と「母村」¹⁾との親密性の現在について考察する。具体的には、移住地の親族関係、および移住2世と在母村親族との交

流の現状を明らかにし、さらに入植記念行事において表象される母村との関係性について述べたい。

(2) 八重山戦後開拓の概要、および先行研究

さて八重山戦後開拓とは、被占領下琉球内における農業移住のことであり、比較的肥沃な未耕地の多かった石垣島および西表島への人口移動である。これら移住者はその移住形態から、(i)琉球政府計画移民、(ii)群島別政府期集団移民²⁾、(iii)単独自由移民の3種類に大別される。(i)は、琉球政府が募集して実施した計画移民であり、1952～57年までの間に、681戸3,142名が入植した(石垣島14、西表島4地区)。(ii)は1948～1951年の間に、民政府・群島政府³⁾計画との関連のもとに入植した、101戸243名(石垣島3、西表島1地区)である。これら4地区は1957年「移住地開発法」の施行に伴い、琉球政府計画に編入された。(iii)は、終戦間もない頃から相次いだ、石垣島や西表島への非正規・非集団的な移住者のことである。宮古地方・八重山他島からの移入が多かったもようである。実態把握は困難だが、1955年現在で石垣島156戸、西表島133戸の単独自由移民が確認されたとするデータがある⁴⁾。

ところで琉球政府資料によると、1948～1967年の琉球出身海外移民数は16,158名であった(石原・安仁屋、1978、163)。これに対して、政府計画による八重山戦後開拓移民は、3,385名である。ただ、後者の行われた1948～1957年に限れば、前者は7,016名であった(同上)。すなわちこの時期、海外移民の半数近くに相当する人口が、八重山へ計画移民として移動したことになる。この点だけをとっても、八重山戦後開拓は、被占領下琉球の人口移動を考察する上で看過し得ない事象だと言えよう。また、現在の石垣島45地区のうち28地区、西表島17地区のうち11地区が、戦後の開拓移住と関連⁵⁾している。すなわち、現代の八重山社会構造を分析する上でも、戦後開拓という事象が構築してきた社会的条件の把握は重要である。

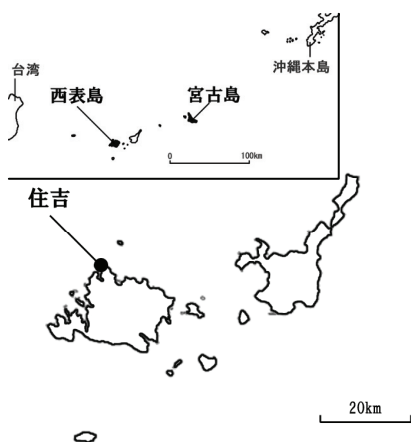
しかし、八重山戦後開拓に関する社会学的調査の蓄積は、決して多くない。石原・安仁屋(同上)や大阪市立大学八重山群島学術調査隊編(1963)は、八重山戦後開拓全般に関する綿密な調査研究を行っており、現在でも有益な資料である。ただ、基礎集落ごとの社会学的調査が十分になされているとは言えない。金城(1988)は、基礎集落ごとに創建経緯や開拓地形成過程をまとめた、優れたドキュメントである。八重山戦後開拓を語る上で欠くべからざる文献だが、本稿の目的とするような調査を行った先行研究ではない。西表島に限れば、基礎集落ごとの調査を最も綿密に行っているのが、総理府特別地域連絡局(1960)である。当時の各開拓集落の社会的状況を伝える好著だが、専ら土地所有状況や営農形態の解明に焦点が置かれている。飯田(1989)は、石垣島のある開拓集落における土地所有や集落形態、村落組織など諸項目をまとめている。飯田がこの集落を対象に選んだ理由は、入植者が沖縄本島・宮古島・多良間島という3つの出身地別の集団からなっているためであり、この点は本稿の目的からも興味深い。しかし調査の結果、「班別に居住区

域を分けているほかは集団ごとのはっきりした差異は認められなかった」という（同上、353）。すなわち、母村との関係の現在については、未解明のままになっている。

そもそも沖縄村落の研究は従来、民俗学や文化人類学を中心に多く行われてきた（佐藤、2007、145）。象徴空間論に関しては、本土の村落の研究よりむしろ先行するところがある（今里、2006、17）。もっとも、本土と沖縄の物理的距離および被占領という事情ゆえに、少なくとも1970年代までは、本土の学界が沖縄の村落共同体を扱うことはほとんどなかったという指摘もある（与那国、1977）。いずれにせよ、沖縄の開拓村落はあまり注目されずに来た。なぜなら沖縄村落研究は、「むらの住民にとって、むらはひとつの宇宙をなしている」（佐藤、前掲）と表現されるような共同体の存在に注目しがちだからだ。こうした村落の「世界観」を扱う象徴空間論的研究において、「沖縄を含めた南西諸島の開拓村落」は「研究対象から外されてきた感拭えない」（渋谷、1993、32）。ここで渋谷が述べている「開拓村落」とは、明治期に創建されたものであり、戦後開拓村落はまして研究対象外とされてきたことは想像に難くないだろう。

2. 調査地の概要

(1) 住吉の入植経緯



図一 住吉と旧下地町
筆者作成。

本調査の対象としたのは、西表島住吉集落（八重山郡竹富町）である。対象とした理由は、入植が宮古民政府計画によって行われたものであるため、比較的資料が得やすく、また入植隊員⁷⁾のほぼす

べてが宮古島旧下地村出身⁸⁾であるため、母村との関係を集団的に捉えやすいからである。以下、住吉集落の入植経緯について概説する。

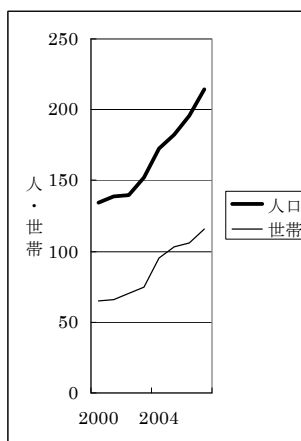
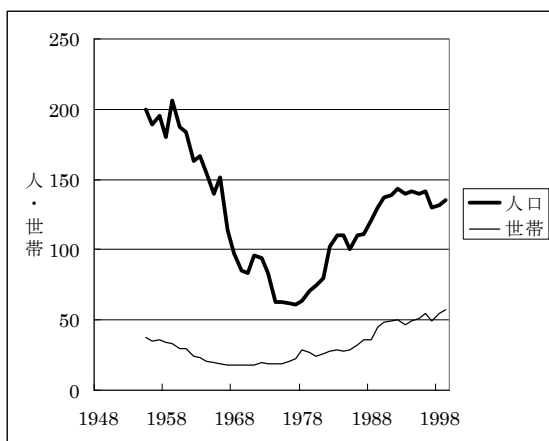
1947年8月、戦後の用材・燃料不足にあえぐ宮古民政府は、米軍政府を介して八重山民政府に陳情し、西表島南西部山林3,400町歩の分譲を受けた。このとき、戦前から西表島に在住していた本土出身炭坑主も、炭坑および水田・牧場の分譲を承諾した。宮古民政府は、伐採隊を編成して西表島での事業を開始するとともに、同隊への食糧補給を目的とした入植隊（「南拓隊」）を募り、炭坑主の提供した土地へと送出した（1948年10～12月）。これが現在の住吉の開闢である。住吉は、団体としての戦後八重山開拓の嚆矢である（以

上、石原・安仁屋、1978；仲宗根、2002 など）。

隊員 29 名はほぼすべて、先述のように旧下地村出身である。隊長は、宮古民政府農林部長の長男であった。隊員募集はもっぱら口頭で、知人づてで行われたようである。入隊の理由はおおむね、宮古島の土地の狭量性にあった。また、隊員の食事・洗濯等の世話をするために「炊事婦」として来住した女性もいた（計 7 名。1948 年 12 月および 1949 年 8 月来島）。そのうち 4 名は隊員またはその兄弟と結婚し、現住している。炊事婦の募集も、知人や親族づてで行われたようである。なお隊員の家族（兄弟や妻、一部父母も）の呼び寄せは、入植 1 年後頃に行われた（以上、1 世からの聞き取り、および『開拓 40 周年記念誌』（住吉公民館）より）。

(2) 人口の推移と世帯構成の現況

呼び寄せられた隊員家族のほかにも、縁故を頼って移住する親族も現れ、また「子宝部落」（無署名、1960）と言われるほどに子供も増えた⁹住吉は、1959 年には 206 名にまで人口が増加した。しかしその後、農業不振を主因として挙家離島が相次ぎ、集落人口は凋落の一途を辿る（図一2）。1980 年代初頭から再び増加に転ずるが、これは 2 世の U ターンと、本土からの移入によるものである。特に後者の伸びは著しく、2007 年現在では集落世帯の約 2/3 を占めている（表一1）。本土出身移入者の大半は、観光業に従事している。なお 2005 年現在、住吉の販売農家数は 11 戸であるが¹⁰、これら農家の多くも観光業と兼業している。



図一2—1 は『開拓 50 周年記念誌』（住吉公民館）、図一2—2 は竹富町提供資料をもとに筆者作成。2つの資料は調査法が異なるため、データの整合性は保証されていない。

図一2—1 住吉集落人口動態（～1999年）

図一2—2 住吉集落人口動態（2000～07年）

世帯主	世帯数	構成比(%)
1世	8	8.2
2世	19	19.4
3世	5	5.1
古参移入者	12	12.2
新規移入者	54	55.1
計	98	100

表一1 住吉の世帯構成現況（2007年現在）

住吉公民館が独自に収集したデータをもとに筆者作成。ただし属性は便宜上、筆者が命名した。「1世」「2世」「3世」は後注7参照。「古参移入者」とは住吉移入後 10 年以上経つ者、「新規移入者」はそれ以外の者を指す。これら移入者のほぼ全てが本土出身者である。

(3) 調査の実施

本調査は3回に渡って実施した。第1回は2008年10月8日～13日、西表島に滞在して入植60周年記念祭の記録、および親族関係などに関する聞き取り調査を実施した。第2回は2008年12月15日～19日、那覇に滞在して他出2世への聞き取り調査、および資料調査を行った。第3回は2009年2月13日～3月5日、西表島・石垣島・宮古島に滞在して、親族間交流等に関するアンケート調査、資料調査、および住吉現住者や在宮古島親族への聞き取り調査を行った。

次節ではまず、現在の住吉における親族関係および行事等についてまとめる。4節では、在宮古島親族と現住2世との交流関係について、主にアンケート調査結果に基づき分析する。5節では、入植60周年記念祭という場における「宮古」らしさの表現について考察する。

3. 住吉現住開拓家系¹¹⁾の親族関係、および行事等

(1) 親族関係

	1親等	2親等	3親等	4親等	5親等	6親等	計	割合(%)
T1		1		1			2	7.1
T2				2			2	7.1
T3			2	2			4	14.3
T4	1	1	2				4	14.3
T5				1			1	3.6
T6							0	0
T7			1				1	3.6
T8							0	0
T9			1				1	3.6
T10	—	—	—	—	—	—	—	—
T11		1	3				4	14.3
T12		1					1	3.6
T13	1		1	2			4	14.3
T14	—	—	—	—	—	—	—	—
T15							0	0
T16	—	—	—	—	—	—	—	—
T17	—	—	—	—	—	—	—	—
Y1							0	0
Y2							0	0
Y3	—	—	—	—	—	—	—	—
Y4	—	—	—	—	—	—	—	—
Y5	—	—	—	—	—	—	—	—
M1			2	3			5	17.9
M2				1			1	3.6
M3		1		1			2	7.1
R1							0	0
R2							0	0
R3	—	—	—	—	—	—	—	—
U1		1		1			2	7.1

表一2 隊員間の親族関係
(入植当時)

現住1世からの聞き取りをもとに作成。姻族については3親等以内を計上。

T1等は隊員番号。

「割合」は、自分以外の隊員(計28名)中に占める親族の割合。塗色した隊員番号は、後に現住2世を子に持つ者。

「—」は未詳。ただし未詳者と有データ者との間に、親族関係はない。

	2親等		3親等		4親等		5親等		6親等		計	割合(%)
	—		父方	母方	父方	母方	父方	母方	父方	母方		
T1弟長女											0	0
T3長男						2(2)	2		3	5(5)	12	57.1
T4四男					1		4				5	23.8
T4弟長男					1		4				5	23.8
T5長男	1								1		2	9.5
T5四男	1								1		2	9.5
T6次男	1				1(1)				6(4)		8	38.1
T6三男	1				1(1)				6(4)		8	38.1
T7長男							2(2)				2	9.5
T8長男					2(2)				8(8)		10	47.6
T9次女							1				1	4.8
Y1長女	2										2	9.5
Y1次男	2										2	9.5
Y1三男	2										2	9.5
Y2長女											0	0
M1四男					2		2		1	2	7	33.3
M1弟長男	1				1	3(3)	2		1	4(4)	12	57.1
M1弟三男	1				1	3(3)	2		1	4(4)	12	57.1
R1長男	2				2(2)				5(3)		9	42.9
R1次男	2				2(2)				5(3)		9	42.9
R1次女	2				2(2)				5(3)		9	42.9

表一3 現住2世間の親族関係

聞き取りをもとに作成。隊員血族のみ（隊員血族でない2世妻との関係は計上していない）。

（）内は、炊事婦（2節(1)参照）を経由した関係数。

「割合」は、自分以外の現住2世（計21名）中に占める親族の割合。

表一2 は、聞き取りをもとに作成した入植当時の隊員間の親族関係である。すなわちこの表は、移住後1年以内（家族呼び寄せまで）の共同生活集団内の親族関係を表すと同時に、母村在住時の親族関係を表している。他出者についてはデータ未詳の部分があるが、聞き取りによれば、これら未詳の8名はいずれも、データを示した者との間に親族関係はない。すなわち、未詳の者どうしに親族関係がある可能性はあるが、表に示した数値に影響はない。

次に、表一3 は現住2世間の親族関係である。この表は、聞き取りをもとに作成した親族関係図（本稿では割愛）から、データを抽出して作成した。表一2 と表一3 を比較すると、隊員間の母村在住時の親族関係に比して、現住2世間のそれは概して多く複雑であることがわかる。これは、隊員の兄弟の来住、および1世女性どうしの親族関係に依る。元炊事婦（2節(1)参照）の中には、母村在住時（婚前）から互いに親族関係にある者や、隊

現住地	住吉		島内		石垣		八重山		宮古		沖縄		本土		海外		計	故人	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		男	女
人数	18	5	3	2	6	11	0	1	1	1	7	4	19	8	0	1	87	2	0
地域別計	23		5		17		1		2		11		27		1		87	2	
割合(%)	26.4		5.7		19.5		1.1		2.3		12.6		31.0		1.1		100		
	西表島内				島外														
地域別計	28				59												87		
割合(%)	32.2				67.8												100		
	八重山						宮古		沖縄		県外								
地域別計	46						2		11		27						87		
割合(%)	52.9						2.3		12.6		31.0						100		

表一4 2世の現住地別人数（本人またはキョウダイが住吉現住の者のみ）

聞き取りおよびアンケート調査結果をもとに作成。

「島内」は住吉以外の西表島内集落。「石垣」は石垣島、「八重山」は八重山郡他島（西表島・石垣島以外）、「宮古」は宮古島、「沖縄」は沖縄本島地方。

なお現住2世男性18名中、長男は6名。

員とキョウダイである者がいた。炊事婦以外の1世女性にも、隊員や炊事婦とキョウダイあるいは親族関係にある者がいた。これら女性がそれぞれ、隊員やその兄弟と結婚することによって、現住2世においては表一3のように複雑な親族関係が成立しているのである。以上より、住吉では開拓地形成過程において、地縁関係と共に親族関係も強めていったことがわかる。

さて、表一4は、聞き取りおよびアンケート調査（詳細は4節）で明らかになった、2世（本人またはキョウダイが住吉現住の者のみ）の現住地別人数である。全87名のうち、67.8%が島外に他出している。当然これらキョウダイも、現住2世と同様の親族関係を有している。すなわち、開拓地形成過程で強められた親族関係は現在、地理的には島外へと拡散している。もっとも、ある移動の重要性は、物理的距離のみで測られるものではなく、何が「人生に痕跡を残す」移動であるかは、移動する本人たちの存在論的問題である（ハージ、2007）。島内外という境界が他出者たちにとっていかなる意味を持つかは、客観的には推し量れないだろう。例えば八重山郡内外を境界と措定してみれば、境界内部には52.9%が残っていることになる。もし他出者たちにとって、この境界こそが重要であったとすれば、2世キョウダイの過半は「域内」に現住しているとみなされよう。この問題については、本調査結果からは解明できない。本稿では差しあたり、宮古島への還流が2名（2.3%）のみであることに注目しておき、4節(1)で議論することにする。

(2) 本家分家および屋号

さて、住吉現住開拓家系は16家系あるが、このうち4家系が本家¹²⁾であり、3家系はその分家に当たる。残りの9家系は、宮古島に本家をもっている。在住吉本家の1世男性（故人含む）のうち、長男は2名である。他の1名は、婿養子先の妻のキョウダイに本家を継げる者がいなくなったため、本家となった。もう1名は、本家である両親が来住したため、本家を継ぐこととなった¹³⁾。沖縄の本家分家関係については、本土のそれとは性質が異なると言われている（比嘉、1992b、33；高橋、1995、273）。沖縄の「ヤー」は本土の「イエ」と違って家産を伴わず、よって本家分家間に経済的な主従関係はない。ヤーは先祖信仰と結合したシンボリック的存在性が強く、本家はこの意味において上位にある。したがって沖縄の本家分家関係は、先祖祭祀の年中行事において強く現れる。住吉における年中行事については、次項で概観する。

ところで沖縄の伝統的な命名法では、屋号を家族名として用いてきた（上野、2002、43）。現在では屋号をつけない世帯が増えてきているようだが（比嘉、1992a、31）、住吉では今でも、屋号が部分的に使用されている¹⁴⁾。ここでは、住吉における屋号のつけ方についてまとめておきたい。比嘉（同上）によれば、沖縄の屋号のつけ方にはおおよそ3種類あって、「屋敷や住居のある地理や地勢によるもの」、「戸主の職業や身体的特徴などによるもの」、「門中など一族内の系譜関係が示されているもの」、に大別されるという。住吉では入植当初から、1世男性の多くに「あだ名」¹⁵⁾（○○シュー）が付けられており、屋号はこのあ

だ名に基づいて付けられた(〇〇ヤー)。あだ名のない者の場合、戸主の実名の後ろに「ヤー」を付けて屋号とした¹⁶⁾。1世男性のあだ名の付け方は、大きく3種類に分けられる。(i)性格によるもの。現住開拓家系では、ガバシュー(頑丈な/バリバリ働く人)、クバガンシュー(頑固な人)、ショウジキシュー(正直/真面目な人)、ヤンワーシュー(暴れん坊な人)の4件を確認した。(ii)身体的特徴によるもの。同じく、ミンジャーシュー(頭に傷のある人)、ミンブリシュー(潜水作業により耳のつぶれた人)の2件を確認した。(iii)姻戚関係を表すもの。ナカバリシュー(宮古島においてナカバリという所から嫁を迎えていた一族の人)のみ確認した。残り9家系のうち、3家系の1世男性はあだ名がなく、実名が屋号となっている。6家系(うち2家系は隊員弟および非隊員血族)については未詳である。

このように住吉の屋号は、戸主の性格や身体的特徴を表すものが多い。唯一(iii)のみ、比嘉の言う系譜関係に基づく屋号に類すると言えるが¹⁷⁾、この一例は本家であり、入植以前からの屋号をそのまま引き継いだものである。移住後に系譜関係を再認識して付けられたものではない。すなわち住吉の屋号において、在母村親族との系譜関係を意識して付けられたものは確認されなかった。さらに住吉内の本家分家関係を意識した屋号もなく、むしろ1戸1戸が独立した「〇〇(戸主)の家」であると認識するような屋号が大半であった。

(3) 住吉における行事

住吉公民館¹⁸⁾主催の年中行事は、新年会と忘年会、そして入植祭(5節で詳述)のみである¹⁹⁾。母村の祭事の踏襲や再生はない²⁰⁾。開拓家系の各家では、旧正月、十六日祭、清明祭、旧盆など、沖縄県下において一般的である祭祀・行事を行っている。その各々についての詳細や、家ごとの相違の有無は未調査である。住吉に本家を持つある開拓家系では、旧正月も旧盆も、少なくとも島内在住の親族はみな本家に集まるという。つまり、前項のように、屋号の付け方においては系譜関係の意識が見られないが、旧盆等の祭祀・行事では本家分家関係が保たれている。もっともこれら行事は、「宮古は宮古、こっちはこっち」(ある現住2世の言)で行うという。つまり互いに訪ねることはせず、宮古島に本家のある開拓家系も、住吉内に有する墓や位牌のもとで行事を行うようだ。この点については、次節(2)で再度確認する。

4. 在宮古島親族と現住2世との交流関係

本節では、住吉現住者を対象に行ったアンケート調査の結果をもとに、在宮古島親族との交流関係について分析する。調査は現住1~3世(原則的に世帯主²¹⁾)を対象として行ったが、ここでの分析は現住2世の回答のみを扱う。その理由は、現住開拓家系の世帯主の多くが2世であること(表一1参照)、および現住1世と3世の母数と有効回答数が少な

いことである。なおアンケート調査の実施詳細は以下の通りである。

＜実施時期＞2009年2月16日～22日

＜対象＞1世6名、2世15名、3世3名（原則的に世帯主）。公民館長の協力のもと、長期不在者等を除いた対象名簿を作成した。

＜方法＞留置法（ただし高齢者など一部は対面調査を行った。それ以外にも、回収時に対面で確認等を行ったケースもある）

＜有効回収数＞1世4名、2世13名、3世2名

ただし2世のうち2名は入植前に生まれた者であり、他の2世との間で条件の相違があるため、以下の分析では対象外とした。本節で分析するのは、移住後に生まれた2世11名による回答である。

(1) 在宮古島親族との交流頻度

まず、現住2世と在宮古島親族との続柄を確認しておく。3節(1)（表—4）で述べたように、島外に他出した2世（キョウダイが住吉現住の者）59名中、宮古島に還流した者は2名のみであった。この2名は互いにキョウダイではない（うち1名は、現住2世2名とキョウダイ）。次に表—5のように、島外に他出した元隊員の中でも、宮古島への還流は2名と少ない²²⁾。このうち1名は現住2世の母のイトコであるが、もう1名は現住2世の親族ではない²³⁾。また表—6は、現住2世の子供の現住地である。「未詳」の2名についても現住地が宮古島でないことは聞き取りから確認できたので、宮古島現住の子供を持つ現住2世はいない。以上から、現住2世にとって最も親等的に近い在宮古島親族は、3名においてはキョウダイ、残りの19名においては（いるとすれば）オジ・オバである。

住吉	島内他部落	石垣島	宮古島
14	2	11	2

表—5 元隊員の現住地（1998年現在）

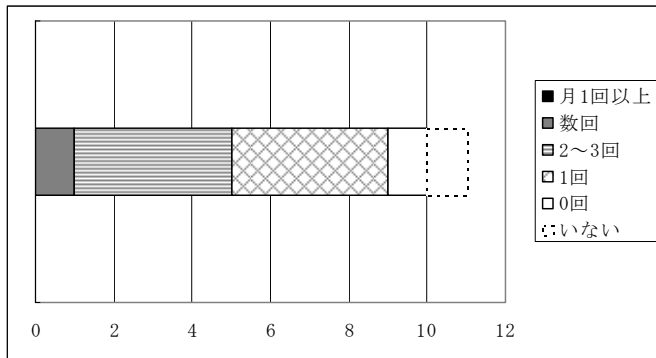
『開拓50周年記念誌』（住吉公民館）をもとに筆者作成。故人の場合は生前の居住地を計上した。

現住地	住吉		島内		石垣		八重山		宮古		沖縄		本土		未詳		計
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
人数	8	10	2	1	6	3	1	0	0	0	4	4	10	2	1	1	53
地域別計	18		3		9		1		0		8		12		2		53
割合(%)	34.0		5.7		17.0		1.9		0		15.1		22.6		3.8		100

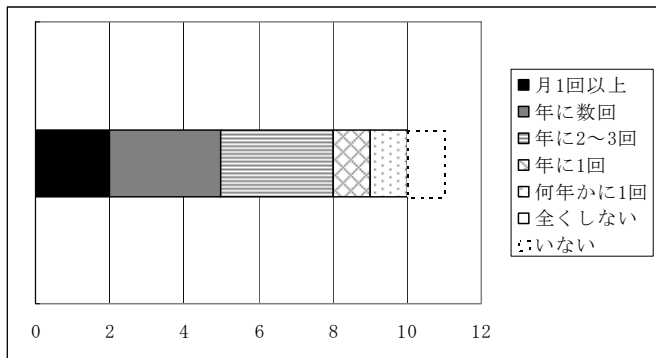
表—6 現住2世の子供の現住地別人数

アンケート調査結果をもとに作成。現住地の表記法は表—4と同じ。なお就学中の者も多いため、この数値は一時的なものと理解される。

さて図—3は、現住2世と在宮古島親族との交流頻度である。ただしアンケートの設問では、交流相手のことを「宮古島在住の最も親しい親戚」と表記し、対象の選定を回答者に委ねた。過去1年間に会った回数は、「1回」と「2～3回」が多く、共に4名であった。電話や手紙などによる連絡頻度は、「年に2～3回」と「年に数回」が共に3名、「月1回



図—3—1
過去1年間に、「宮古島在住の最も親しい親戚」と会った回数



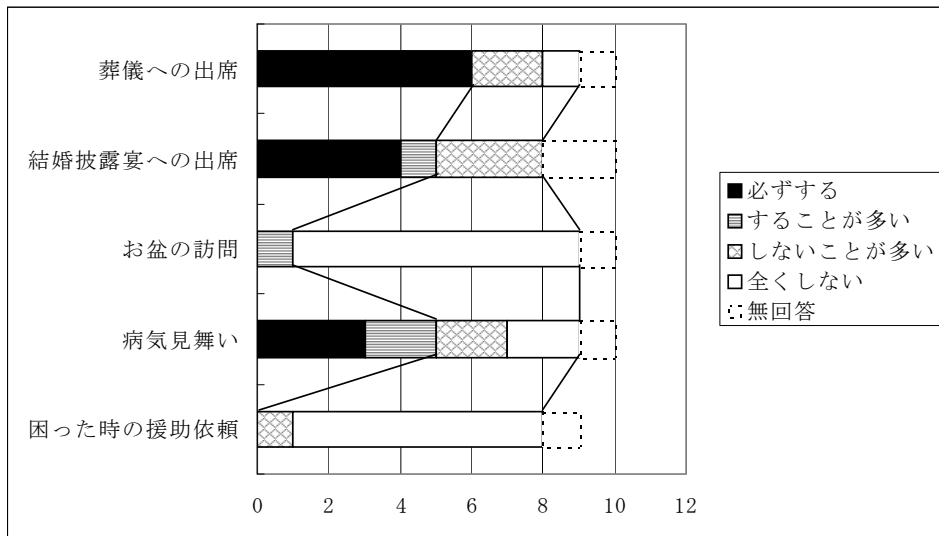
図—3—2
1年間に、「宮古島在住の最も親しい親戚」と電話・手紙などで連絡する回数

以上」が2名であった。これらの数値について単純比較できるような既存データはないが、例えば奈良県大和郡山市白土町を調査した清水（1983、54）によると、都市型親類の接触頻度は一般に、年1回が最も多く、次いで不定期、月1回が多いと言われるが、清水の調査村落におけるムラウチワ以外の親類との接触頻度も、同じ傾向を示したという。また下地（2007、56）は、宮古島出身他出者による宮古島居住者への連絡頻度について、「半年に1回」以上が60%余であり、うち「月1回」が最も多く、次いで「2～3ヶ月に1回」が多いとの結果を提示している（数値の詳細は不明）。これらと比して図—3の結果は、目立って多くも少なくもなく、おおむね同様の傾向を示していると言えよう。すなわち現住2世と「宮古島在住の最も親しい親戚」との交流頻度は、離れて居住する親族間の交流として、おおむね一般的傾向のうちにあると言えるだろう。

(2) 在宮古島親族との生活諸連関

つぎに、現住2世と在宮古島親族との生活諸連関について見る。アンケートでは清水（1983、44-47）を参考に、「葬儀への出席」「結婚披露宴への出席」「お盆の訪問」「病气見舞い」「困った時の援助依頼」を交際の指標として用いた²⁴⁾。清水は各項目への親類の参与を調査したが、本調査では「先方の」葬儀等への出席・見舞いや、「先方への」依頼について尋ねた。ただし「お盆の訪問」については、自身が本家である者には在宮古島親族の来訪について尋ねた。なお前項と同様、設問では「宮古島在住の最も親しい親戚」と表記し、対象の選定を回答者に委ねた。結果は、図—4の通りである。

まず、「お盆の訪問」について注目したい。「することが多い」と回答した1名は、在宮



図—4 「宮古島在住の最も親しい親戚」との生活諸連関

「宮古島に親戚はいない」と答えた者が1名いたため、回答数は10名となっている。さらに「困った時の援助依頼」の項には1名、無効回答があった。

古島の本家およびキョウダイを持つ者である。それ以外の回答者はすべて、「全くしない」と答えている。加えて、本家である1世世帯主2名からも、お盆における在宮古島親族の来訪は全くない、との回答を得た。すなわち3節(3)に示した聞き取り内容と、同様の結果を得た。

一方、「必ずする」「することが多い」という回答が比較的多かったのが、「葬儀への出席」「結婚披露宴への出席」「病気見舞い」である。このうち「結婚披露宴への出席」について、清水(同上、44-45)は、「家的契機」への参与として扱っている。たしかに、結果的にはそのように見ることができるかも知れない。ただ本調査では、宮古島現住者の結婚披露宴への出席の度合いについて、それが親族のものであれ非親族のものであれ、全く同じ答えをする回答者が少なからずいた(図—5)。すなわち、少なくとも現住2世自身からすれば、

		対友人知人					
		a	b	c	d	n	0
対親戚	a	2		1	1		2
	b		1				
	c			1			2
	d				1		
	n					1	
	0						1

葬儀への出席

		対友人知人					
		a	b	c	d	n	0
対親戚	a	3			1		
	b		1				1
	c			1			2
	d				1		1
	n					1	
	0						1

結婚披露宴への出席

		対友人知人					
		a	b	c	d	n	0
対親戚	a				2		1
	b		1				
	c			1			1
	d				1		2
	n					1	
	0						1

病気見舞い

図—5 対「親戚」と対「友人知人」との回答内容の比較

3項目について、「宮古島在住の最も親しい親戚」の場合と、「宮古島在住の最も親しい友人知人」の場合とで、回答者がそれぞれどのように回答したかを表している(数値は人数)。略号は、a.必ずする、b.することが多い、c.しないことが多い、d.全くしない、n.無回答、0.いない。色を塗った部分が、対「親戚」でも対「友人知人」でも、同じ回答をした者の数である。

「結婚披露宴への出席」の誘因は、「家的契機」のみにあるわけではないと言えよう。換言すれば、「結婚披露宴への出席」は、少なくとも本事例においては、家的な親族関係²⁵⁾の指標としては用いられない。「葬儀への出席」の場合も、対親族と対非親族とで若干の差はあるものの、やはり同様のことが言えよう。対親族と対非親族との差が一番表れていたのは、一般的には「家的契機」とは見なされない「病氣見舞い」であったが、その理由は本調査結果からは明らかにできない。

最後に「困った時の援助依頼」について、ほとんどの回答者が「全くしない」と答えた。アンケートの他箇所では、同居家族以外で最もよく援助依頼する相手を尋ねたが、その結果が表一七である。在宮古島親族には依頼しないが、他の親族や友人知人に依頼する、という者が5名いた。したがって現住2世は、困った時の援助を依頼する相手として、在宮古島親族以外を想定している、とすることができる。

		最もよく援助依頼する相手（同居家族以外）					思い当たらない
		住吉			島内	石垣島	
		親	兄弟姉妹	友人知人	友人知人	親戚	
「宮古島在住の最も親しい親戚」への依頼	しないことが多い						1
	全くしない	1	1	1	1	1	2
	無回答						1
	親戚はいない			1			

表一七 「困ったときの援助」を最もよく依頼する相手（同居家族以外）
 図一四の回答内容ごとに集計した。「親戚」は、親子・キョウダイ・祖父母以外の親族。

(3) 現住2世と在宮古島親族との関係の小括

現住2世と在宮古島親族との間において、接触や連絡の頻度は低くなかった。その一方で、旧盆行事における接触は、住吉と宮古島のいずれに本家があるかと、ほぼ全くなかった。これは、西表島内の親族が住吉の本家に集まることと対照的である（3節(3)参照）。盆の来訪は「当該家の先祖に関する集合化の契機」と見なされ（清水、1983、46）、こと沖縄の本家分家関係においては一般に重要であると思われるが（3節(2)参照）、この契機は住吉現住開拓家系と在宮古島親族との間で共有されていない。葬儀や結婚披露宴への出席度合いは低くなかったが、これは本事例では、家的な親族関係の指標とは見なせなかった。また現住2世は、困った時の援助を依頼する相手として、在宮古島親族を想定していなかった。以上から、現住2世と在宮古島親族との関係は、家的な規範・義務²⁶⁾や援助関係によるものというよりも、個人的・情緒的な交流関係が保たれているものと考えられる。

5. 入植祭における母村との関係

(1) 入植祭の概要、および参加者について

入植祭は、新年会や忘年会を除けば、住吉公民館として唯一の年中行事である。ある現住1世によれば、「入植3年祭」²⁷⁾を行ったのが最初であった。入植隊が西表島に到着し

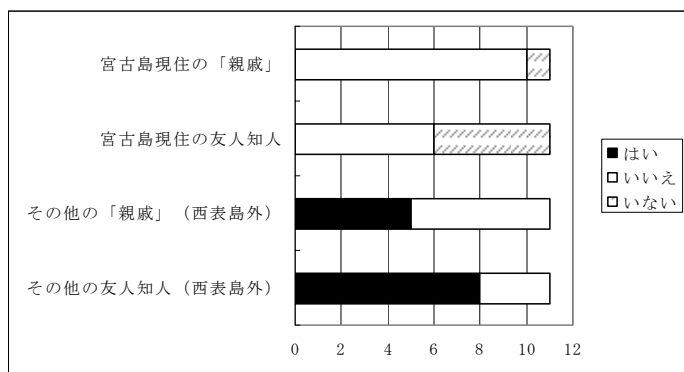
た10月11日を記念日として毎年行っており、5年ごとに前夜祭や式典も催す。さらに10年に1度、最も規模を大きくして執り行い、記念誌も発刊する。40周年記念（1988年）の期成会は1世と2世²⁸⁾、50周年（1998年）は2世のみが役員となり、60周年（2008年）の記念事業実行委員会は2世と本土出身移入者が役員となった。入植祭で通常行う内容は、運動会やグランドゴルフ大会などの各種イベント、共同作業による炊き出し、祝賀会（次項）、および住吉神社の参拝である。

住吉神社は入植後6年以内²⁹⁾に、当初はウガンジョ（拝所）として創られた。副隊長の提案で、高台の高木付近に宮古島の土を入れてウガンジョとしたのが始まりである（ある現住1世からの聞き取り³⁰⁾）。やがて社を設けて整備されていったようだが、祭神はなく、いつから「住吉神社」と呼ぶようになったのかは未詳である。現在の鳥居や階段は、2000年5月30日に建立された。住吉神社では日常的な参拝は行われておらず、入植祭以外の行事が行われることもない。記念祭においても、参拝の仕方に特別な決まり事はないようである。2008年10月12日の60周年記念祭³¹⁾においては、公民館役員2名、記念事業実行委員3名、婦人会役員2名、その他の現住2世4名、3世1名、島外現住2世2名の、計14名が参拝した。全員が40～50歳代であり、1世の参加はなかった。供え物をした後、銘々に社の前に立ち、公民館長が「今年一年、住吉公民館が、無事で、住民一同、健康でありますように、お願いします」と述べるに合わせて全員で合掌し、参拝を終えた。

ここで注目しておきたいのは、参拝に本土出身移入者も参加していたことである。婦人会役員の2名のほか、先述のように記念事業実行委員のうちの2名³²⁾（ともに男性）が該当者であった。このことから、住吉神社参拝が、開拓家系や隊員血族だけに限られた行事ではないことがわかる。さらに実行委員の2名は式典においても、舞台上がり挨拶や報告を行った。

10年に1度の式典には、町長など公人も来賓として祝辞を述べる。60周年記念式典においては、竹富町長、竹富町議会議長、八重山支庁長、そして宮古島市長が招かれた³³⁾。宮古島の公人の招待は、遅くとも40周年からは行われており、同年および50周年には下地町長が祝辞を贈った。

公人がこのように参加する一方で、在宮古島親族は、入植祭にはほとんど来ないようで



図一6
入植60周年記念祭への「親戚」・非「親戚」の来島状況（現住2世回答）

「親戚」の範囲の判断は、回答者に委ねた。

ある。今回のアンケート調査において、「宮古島現住の親戚」が60周年記念祭に際し来島したと回答した者は、皆無であった（図—6）。前節で分析したように、現住2世と在宮古島親族との間では、個人的・情緒的な交流関係が保たれていると考えられるが、入植60周年記念祭はこの交流の場ではなかった。一方で、「その他の親戚」が来島したという回答は11名中5名であった。筆者は当日、石垣島や沖縄本島在住の他出2、3世数名の参加を確認した。

(2) 入植祭における「宮古」の断片的配置

50周年記念祝賀会（1998年）		60周年記念祝賀会（2008年）	
演目	演者	演目	演者
トーガニあやぐ	公民館・記念事業期成会・婦人会各役員	御前風	公民館・記念事業実行委員会・婦人会各役員
住吉音頭	住吉婦人会（1世）	住吉開拓物語Ⅱ	住吉子供会
黒田節	中学校教諭1名	宮古民謡と踊り	プロの宮古民謡歌手
河内男節	住吉婦人会（2世・移入者）	豊年の歌	住吉婦人会（2世・移入者）
住吉開拓物語	住吉子供会	ダンス	中学校職員
アブジャーマ	上原地区青年会	日本舞踊	在石垣島2世女性1名
宮古民謡	プロの宮古民謡歌手	ダンス	住吉婦人会（2世・移入者）
うるわしの琉球	住吉子供会	オリジナル演芸	住吉青年会
エイサー	住吉子供会・住吉婦人会（2世・移入者）	クイチャー	全員
クイチャー	全員		

図—8 50周年・60周年記念祝賀会における演目（スピーチ以外）

住吉公民館発行のしおりをもとに筆者作成。

「上原地区青年会」は、住吉と近隣4集落で構成する青年会。演目の「アブジャーマ」は八重山古典民謡。「住吉青年会」は60周年を契機に発足。

歌」と「クイチャー」は宮古古典民謡・舞踊、「御前風」は、沖縄県下で座開きに広く踊られる琉球古典民謡・舞踊、「住吉音頭」は1世女性が50周年に際して作ったものである。沖縄県下では、座の最後にはカチャーシーを踊ることが多く、西表島の他の行事でもその傾向があるが、宮古地方では替わりにクイチャーを踊ることが多い。いずれも列席者全員が無礼講的に参加するところに共通性があるが、カチャーシーは完全な即興踊りであるのに対し、クイチャーは全員が輪になって、ある程度定まった所作をとる。60周年記念祝賀会では、舞台上と舞台下に2つの円が作られ、不慣れな者も他人の所作を真似ながら踊りに参加していた。このクイチャーを集落行事で踊ることは、島内では住吉だけの特徴であると言える³⁶⁾。なお「住吉音頭」以外の婦人会の舞踊は、2世および移入者が行っているが、後者には2世の妻以外の者（本土出身夫婦の妻）も多く含まれている。

「住吉開拓物語」は住吉子供会（中学生以下）による演劇であり、指導は学校教諭が行っている³⁷⁾。演者には当然、本土出身者の子供も加わっている。60周年においては、現住2世の妻である教諭（本土出身）が指導の中心となり、児童・生徒と共に現住1世への聞き取りを行って脚本を作成した。劇の内容は50周年でも60周年でも、1世による開拓過程を再現しているが、ほぼ全編に渡って宮古言葉でセリフを述べるのが特徴的である。

入植祭の祝賀会では、住民らが様々な演目を披露する。図—8は、50周年および60周年記念祝賀会における演目である³⁴⁾。「住吉開拓物語」（演劇）以外はすべて踊りであり、地謡は近隣集落の者5名が担当した³⁵⁾。演目のうち、「トーガニあやぐ」と「豊年の

住吉では現在、2世どうしの日常会話でも、宮古言葉が使われることはまずない。「住吉開拓物語」は、宮古島からの開拓移住という来歴を、再確認するものであると言えよう。

一方、劇中でも使われる「アララガマ」という語は、住吉でしばしば耳にするほぼ唯一の宮古言葉である。本来は「精神／魂／根性」を表す語だが、ふつう「なにくそ／負けてたまるか」といった意味で用いられ、現在の宮古島でも、例えば学校の体育活動における横断幕などに使われている。また、宮古人氣質を「アララガマ精神／魂／気質」と表現することも少なくないようである（宮国、1983）。ただ住吉ではこの語を、独自の開拓過程の苦難と、それに耐え抜く中で強めてきた団結心の表現として用いることが多い。つまり、宮古島からの開拓移住によって形成してきた地域性を、この宮古言葉で表象していると言える³⁸⁾。50周年・60周年記念式典の式辞でも用いられ、特に後者においてはその継承が強調された³⁹⁾。

その他、宮古民謡の第一人者を招いてショーを催し、また休憩時間にも会場に宮古民謡を流していた。以上のように、記念祭の様々な局面に「宮古」らしさが配置されていた。

(3) 小括

入植祭は、在宮古島親族との交流の場ではなかった。一方で、他出2、3世は数名以上が参加していた。また、60周年記念祭の実行委員会には本土出身移入者も参加し、式典での挨拶や、祝賀会の座開きの演舞も行った。祝賀会における婦人会舞踊には、本土出身夫婦の妻たちも参加していた。子供会演劇も、住吉現住のすべての子供たちが参加した。(1)では住吉神社参拝に関して、開拓家系だけに限られた行事ではないことを確認したが、このことは記念祭全体に対して言える。つまり入植祭は、入植者の親族関係ではなく、住吉現住者の地縁関係において執り行われているのである。ただし、本土出身移入者が実行委員になるのは今回が初めてである⁴⁰⁾。これは、式辞において「先輩達から(…)バトンパスして以来、本土から移り住んだ人達も仲間として受け入れ(…)」と述べられているように⁴¹⁾、移入者が急増している集落の現状(表一1)を反映しているものと思われる。

入植祭は、宮古島の祭事の再生ではなく、移住後に新たに作り上げてきた行事である。行う内容・演目は年ごとに異なり、定まった儀式はなく、各年においても行事全体としての一貫性はない。ただその中の様々な局面に、「宮古」らしさを示すものが断片的に配置されており、宮古島との繋がりが再確認されていた。

6. むすび

現住2世と在宮古島親族との関係は、家的な規範・義務や援助関係によるものというよりも、個人的・情緒的な交流関係が保たれていた。この交流頻度は接触・連絡ともに、少なくとも現住2世が「最も親しい親戚」と認識する相手との間では、決して低くなかった。だが入植60周年記念祭に際して、在宮古島親族はほぼ全く来島していなかった。この行

事は入植者の親族関係ではなく、住吉現住者の地縁関係において執り行われていた。入植祭は宮古島の祭事の再生ではないが、式辞・演目等の様々な局面において、「宮古」らしさを示すものが断片的に配置されており、宮古島との繋がりが再確認されていた。

冒頭に述べたように、倉光（1998、77）は戦後開拓集落における母村の祭りの再生について、母村の「生活世界」の再生の試みであると位置づけている。もっとも倉光の調査した「花祭り」は儀式的要素が強く、住吉の入植祭とは全く異なるものである。とは言え1世にとって入植祭は、宮古民謡・舞踊を共有する数少ない場であり、母村の「生活世界」の刹那的な再生であったと言うこともできる。だがそうだとした場合、母村での生活を体験していない者たちは、この刹那の再生の背後に「生活世界」を見ることはないだろう。「母村の生活世界」を持たぬ者にとって、入植祭における「再生」あるいは再確認はすべて、住吉における経験に他ならない。入植祭は住吉の地域性をこそ表現する場であり、散りばめられた「宮古」的なものによる母村との関係の再確認は、開拓移住によって築き上げてきた地域性の表現の一部であると言えよう。このことが端的に表れているのが、先述の「アララガマ」という語の住吉における用法である。それは宮古地方で一般的な言葉であると同時に、住吉独自の開拓経験が織り込まれた語であり、地域性の表象であった。この地域性を表現する場の創出に、本土出身移入者も同列で参加し、また他出2、3世も場を共有していた。すなわち入植祭は、他出者と移入者を含めた地域的な親密関係を確認する場でもある。母村の存在を前提とする開拓移住史は、この地域的親密関係のシンボルであると言えよう。

蘭（1988）は、満州開拓団を母体とする熊本県の戦後開拓集落について、実態としての開拓共同体が解体した後も、その「極めてユニークな歴史＝シンボル」を共有する「シンボル共有体」が維持されたことを指摘し、これを「主観的な『共属感』による共同性の形成」と位置づけている。と同時に、世代交代して「直接体験者」が減少した後も、このシンボルが維持されるかどうかは不明であることを示唆している。本稿が見た住吉では、集落運営の中心は2世へと世代交代しており、また、本土出身移入者が急増していた。入植祭は、「母村の生活世界」を持たず、開拓移住の「直接体験者」ではないこれらの者たちが、開拓移住史をシンボルとして地域的親密関係を形成・維持しようとする試みであったと言えるであろう。

現住2世においては、在宮古島親族との個人的・情緒的交流が保たれていたが、すでに確認したように1～3世の宮古島還流はごく少なく、世代を経るごとに遠縁になって来ている。交流が家的というよりも個人的・情緒的である以上、冒頭に述べた李（2000）の言う普遍的現象にならって、関係が疎遠になっていくことも十分にあり得る。だが、移住2世代目にして生じた他出者の続出による人口激減と、その後の本土出身移入者による人口急増という、極めて流動的な状況下に置かれた開拓移住集落において、母村との関係は、地域的親密関係を維持する上で重要なシンボルであると言える。すなわち母村との親密関

係は、開拓家系の親族関係を前提としつつも、現在の移住地における地域的親密関係に包摂されているのである。そうであればこそ全ての現住者が、このシンボルを共有できるのである。母村との親密関係はこのように、その重要性の質を変容させつつ、維持されていると言える。

注

- 1) ただし本稿の調査地の住民たちが、送出元のことを「母村」と呼ぶことはない。本稿ではあくまで便宜上、この語を使用することにする。
- 2) 筆者による呼称。石原・安仁屋（1978、177）は、「群島政府・民政府の『契約開拓移民』」と呼んでいる。
- 3) 琉球政府発足（1952年4月）以前の琉球は、奄美・沖縄・宮古・八重山の4群島に分割統治されていた。宮古・八重山両民政府はともに1947年3月に発足し、1950年8月に両群島政府に改組された。ちなみに民政府時代は米軍政府により各知事・議員が任命されていたが、群島政府以降、公選制となった。
- 4) 以上、(i)(ii)の数値は八重山地方庁編（1967）、(iii)は社団法人琉球農林協会（1955）による。
- 5) 近代以前に創建された集落で戦後開拓移民が合流したものを含む。
- 6) 本稿では便宜上、沖縄県以外の国内を「本土」と呼ぶことにする。
- 7) 本稿における用語を整理しておく。「隊員」＝入植隊として西表島へ来住した者。「1世」＝隊員あるいは隊員の兄弟（呼び寄せ）、その他被占領期に農業移住した者。また各々の妻も含む。「2世」＝上記1世の子ども（配偶者は含まない）。「3世」＝上記2世の子ども（配偶者は含まない）。「現住○世」＝現在、住吉集落に在住している○世。「他出○世」＝住吉集落から他出した○世（島内在住者を含む）。なお、これらのうち「現住○世」「他出○世」以外は、住吉住民の用法に倣っている。
- 8) 入植隊送出直前の1948年8月、下地村から上野村が分村した。厳密に言えば隊員のうち1名は、上野村出身である。また他の1名は奄美大島出身であり、下地村で現地満期して結婚し居住した。この2名はすでに住吉から他出しており、子や孫も現住していない。なお下地村は1949年1月下地町に昇格し、2005年10月合併して宮古島市となった。
- 9) 八重山開発事務所（1956）によると幼児率（未就学以下）は、西表島の開拓移住集落全体で25.6%、対して住吉では36.9%（206名中76名）であった。
- 10) 2005年農林業センサス農業集落カードより。
- 11) 本稿では便宜上、同一の1世を起点とする父系集団を、「開拓家系」と呼ぶ。
- 12) ある2世は「ヤーモト」（家元・屋元の意か）と呼び、ある1世は「大きい先祖を持つ家」と表現した。ただしいずれも、住吉内で一般的な言い方であるかは未詳。ちなみに比嘉（1992b、33）によれば、宮古地域では本家のことを「ムトゥ」（元）「ウヤムトゥ」（親元）と呼ぶという。

- 13) このうち最後の1名のみ、開拓家系の者への聞き取りを行えなかった。
- 14) 後注16参照。また家族名としての使用についても、1件だけであるが、父の屋号と実名とを合わせた名で呼ばれることのある現住2世を確認した。
- 15) ある現住2世による表現。
- 16) 2世まではこれらあだ名や屋号を理解しており、日常会話に使うこともある。3世における理解については未調査である。現住3世の中には自身の屋号を語る者がいたが、集落の全てのあだ名・屋号を理解しているかどうかは詳かでない。
- 17) この開拓家系の現住3世(後注16と同一人物)は、自身の屋号を「ナカバリの〇〇(姓)」であると述べた。この表現は、比嘉が(iii)の例として挙げている「アガリトカシキ」(東の渡嘉敷)に類するだろう。
- 18) 沖縄において「公民館」とは住民自治組織を指し、ほとんどのケースにおいて行政協力組織も兼ねる。
- 19) 公民館長からの聞き取り。もっともこの他、近隣4集落(住吉と共に連合地区を形成している)と合同での敬老会や、町主催のマラソンへの公民館単位での協力など、公民館主催ではないが共催・協力するイベントは多い。
なお入植祭は、島内の他の政府計画移民集落でも行われているが、単独自由移民集落では行われていない。
- 20) 近代情報(1997)、仲間編(1989)によると、旧下地町には、下地神社で行う神事である「こもりウガン」、豊作を願う「ンナフカ祭り」、疾病を払う「スマフサラ」などの祭事がある。
- 21) 妻のみ2世であるケース、および調査対象者の都合により世帯主の親(2世)あるいは子(3世)による回答の希望があったケースの、計3件についてのみ非世帯主を対象とした。
- 22) 隊員以外の1世の現住地については、十分なデータが得られなかった。
- 23) ただし7親等以上の遠縁関係にある可能性はある。
- 24) 清水が用いた指標は「結婚披露宴の出席」「盆の来訪」「病気見舞」「困ったときの援助」「電話によるコミュニケーション」である。このうち「コミュニケーション」については別項目(図-3-2)で扱ったため割愛し、「葬儀への出席」を加えた。
- 25) 清水(1983、54)は「親類関係の構造を内包させながらも、その構成単位である家の規範的・義務的性格に規定される規定的親族体系」を「家的親類」と呼び、「選択的・情緒安定的規範」をもつ「任意的双系親族体系」である「個人的親類」と区別している。本調査では、交流関係の父系/母系/双系的傾向については明らかにできなかった。
- 26) 後注24参照。
- 27) 住吉に隣接する砂浜で、各家の持ち馬の競走を行った。高台には来賓席も作ったという。その来賓については、この現住1世が「来賓は、誰々がともしてあるか、まだわからんのに、人もわからんのに」と語ったことから、宮古島の親族や知人ではなく、面識のあまりない西表島の人々を招いたものと考えられる。

- 28) 60周年記念式典の式辞において「四十周年記念事業を契機に先輩達から叱咤激励をいただきバトンパスして以来(…)」と述べられていることから、これ以降、集落の運営は2世が中心になっていったものと思われる。
- 29) 後述の副隊長が1954年に他界していることから算出した。
- 30) 拝所の土は、宮古島の神社に頼んでもらってきた、と語る現住1世もいた。
- 31) 今回の記念式典・祝賀会は、10月11日ではなく翌日に行われた。前夜祭もあるため、本祭を日曜日に行うこととなったそうだが、日程決定の際には「揉めた」という。
- 32) それぞれ1980年代初頭、2000年代中葉に移入。ともに公民館長経験者である。
なお50周年記念の期成会役員および公民館役員は、すべて2世であった。55周年の年(2003年)には、上記移入者のうち前者が2世から公民館長に推されたが、「ちょっとおつきいお祭り事」に際して「やっぱり対外的なこともあるし」と辞退したという(本人からの聞き取り)。
- 33) 八重山支庁長と宮古島市長は公務のため代読であった。後者の代読は宮古島市教育長が行った。
- 34) 40周年については全演目の資料を得られなかったが、『開拓50周年記念誌』(住吉公民館)には、1世婦人による舞踊「根間の主」(宮古古典民謡)や「御前風」、青年による「住吉口説」(詳細未詳)、保育幼稚園児による「ばんがむり」(宮古の子守歌)などの演目が記されている。
- 35) 50周年も60周年も、同じ5名が担当。このうち少なくとも1名は他出2世である。
- 36) 宮古地方出身者は、住吉と近隣4集落に多く集まっていた(社団法人琉球農林協会、1955)。
このうち政府計画移民集落は住吉のみであり、後注19で述べたように、他の単独自由移民集落では入植祭は行っていない。かわりに西表島古来の文化に即した行事の再生はあるが(「デンサー祭り」)、「宮古」色を打ち出した行事は行われていない。
- 37) 開拓移住史の演劇化は、1989年に小学校の学習発表会において行ったのが最初であったようである(住吉公民館『開拓40周年記念誌』より)。
- 38) 60周年記念祭に参加したある他出2世は、「住吉には文化がない。ただ、アララガマ精神だけが合った」と筆者に語った。
- 39) 「(…)今の輝かしい住吉の繁栄はまさしく、苦節六十年の汗と涙の結晶であり、あらためて先人、先輩達各位のアララガマ魂と団結力に深甚なる敬意を示す次第であります(…)先人達から学んだアララガマ魂と団結力は、現在も生き続けています。今から二十年前の四十周年記念事業を契機に先輩達から叱咤激励をいただきバトンパスして以来、本土から移り住んだ人達も仲間として受け入れ、公民館の歴史を守り、次世代への継承もしてまいりました(…)」(住吉公民館発行のしおりより)。
- 40) 後注32参照。
- 41) 後注39参照。

文献

- 蘭信三、1988、「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における『共同性』—熊本県東陽開拓農協の事例」『ソシオロジ』33(1)：115-137.
- ハージ、ガッサン・ジョセフ、2007、「存在論的移動のエスノグラフィ—想像でもなく複数調査地的でもないディアスポラ研究について—」『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』有信堂高文社：27-49.
- 比嘉政夫、1992a、「沖縄における屋号—その機能と類型—」沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会編『沖縄県姓氏家系大辞典』角川書店：31-32.
- 、1992b、「家族の構造と親族組織」沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会編、同上：32-35.
- 飯田耕二郎、1989、「八重山諸島における戦後の開拓地—石垣市平野地区を中心として—」浮田典良編『日本の農山漁村とその変容』大明堂：339-353.
- 今里悟之、2006、『農山漁村の〈空間分類〉—景観の秩序を読む』太洋社.
- 石原昌家・安仁屋政昭、1978、「八重山諸島における開拓移住行政の推移と移住地の実態分析」『沖縄国際大学文学部紀要社会科学篇』6(1・2)：151-217.
- 近代情報、1997、『新宮古風土記』近代情報.
- 金城朝夫、1988、『ドキュメント八重山開拓移民』あ〜まん企画.
- 倉光ミナ子、1998、「開拓地の形成と『花祭り』の再生—愛知県豊橋市『幸(みゆき)町』を事例に—」『人文地理』50(4)：67-79.
- 李仁子、2000、「移住一世の『故郷』—つきあいの風景」福井勝義編『講座 人間と環境 近所—つきあいの風景—つながりを再考する』昭和堂：23-56.
- 宮国定徳、1983、「アララガマ、精神とその背景」『宮古研究』4：46-56.
- 無署名、1960、「開発を待つ西表」『オキナワグラフ 1960年5月』沖縄グラフ社.
- 森仁志、2007、「再創造／想像されるエスニック・コミュニティと文化—ハワイ日本文化センターの売却問題を事例として—」『移民研究』3：27-47.
- 仲間井左六編、1989、『下地町制施行40周年特集』近代情報.
- 仲宗根将二、2002、「〈資料紹介〉新聞に見る：1946.6～1950.5—戦後初期宮古の八重山開拓と移住」沖縄国際大学南島文化研究所『八重山、竹富町調査報告書(4)—地域研究シリーズ No.30—』：99-121.
- 大阪市立大学八重山群島学術調査隊編、1963、『八重山群島学術調査報告 1961』大阪市立大学.
- 貞好康志、2000、「『民族性』と『在地性』—ジャワの鄭和祭にみる交錯」福井勝義編、前掲：91-116.
- 佐藤康行、2007、「アジアの共同体比較」日本村落研究学会編『むらの社会を研究する—フィールドからの思想』農山漁村文化協会：140-152.
- 関孝敏、1973、「開拓部落の展開と村落構造—講組織を中心として—」『社会学評論』24(4)：19-41.

- 社団法人琉球農林協会、1955、『戦後 琉球農林水産業十年の歩み』(=沖縄県農林水産行政史、1982、『沖縄県農林水産行政史 第十二巻(農業資料編 III)』農林統計協会：3-122)。
- 渋谷研、1993、「沖縄の開拓村落に見る世界観—在来村落との関係に主眼を置いて—」『南島史学』41：17-33.
- 清水由文、1983、「家族と親族組織」『ソシオロジ』87：33-55.
- 下里潤、2007、「宮古島における人口還流と社会的ネットワーク」平岡昭利編『離島研究 III』海青社：49-65.
- 総理府特別地域連絡局、1960、『西表島調査報告書(詳説) 第II編』総理府特別地域連絡局.
- 鈴木勁介、1993、「国内移住における文化変容に関して—奈良県吉野郡十津川村と北海道樺戸郡新十津川町—I」『和光大学人文学部紀要』28：1-14.
- 、1994、「国内移住における文化変容に関して—奈良県吉野郡十津川村と北海道樺戸郡新十津川町—II」『和光大学人文学部紀要』29：109-119.
- 、1995、「国内移住における文化変容に関して—奈良県吉野郡十津川村と北海道樺戸郡新十津川町—III」『和光大学人文学部紀要』30：31-48.
- 鷹田和喜三、1986、『北海道の村落祭祀研究—母村と移住村の比較研究—』拓殖大学研究所.
- 高橋明善、1995、「北部農村の過疎化と社会・生活変動」山本英治・高橋明善・蓮見音彦編『沖縄の都市と農村』東京大学出版会：241-283.
- 上野和男、2002、「沖縄の名前と社会—閉鎖的な名前体系の一事例として—」記念論集刊行会編『琉球・アジアの民俗と歴史—比嘉政夫教授退官記念論集—』榕樹書林：41-60.
- 八重山地方庁編、1967、『八重山開拓記念誌 入植十五周年』琉球政府農林局.
- 八重山開発事務所、1956、『八重山開拓状況』(沖縄県公文書館所蔵)。
- 与那国暹、1977、「解説」田村浩著『琉球共産村落之研究』至言社.

2008 年度次世代研究「八重山戦後開拓集落と母村との間の親族間交流の変容」（研究代表：越智正樹）による成果である。

【メンバー】

越智正樹（京都大学大学院農学研究科 博士後期課程）